

夏目漱石

予の描かんと
欲する作品

予の描かんと欲する作品

いかなるものを描かんと欲ほつするかとの御質問であるが、私は、いかなるものをも書きたいと思う。自分の能力の許すかぎりは、いろく種類の変化したものを書きたい。自分の性情に適したものは、なるべく多方面にわたって書きたい。しかし、私のような人間であるから、それは単に希望だけで、その希望どおりに書くこととはできないかもしれぬ。で、御質問に対して漠然ばくぜんとしたお答えではあるが、たいてい以上に尽きている。私は、ある

主義主張があつて、その主義主張を創作によつて世に示しているのではない。であるから、こういうものを書いてこうしたいという、局部的な考えは別にない。したがつて、社会一般に及ぼす影響とか、感化とかいうけれども、それも、作物の種類、性質によつておのずから生じて来るものであるから、こういう方面の人を、こういうふうに、こういう点で影響しようというのは、こゝに判然と具象的にでき上つたものについていうことで、それを、作物のまだでき上つていない未来のことについて、今こゝに判然ということとはできない。

では過去の作物について話せというのですか。では
あなた貴方のほうで質問を呈出してください。それについてお
 答えることにします。『ぐびじんそう虞美人草』の藤尾の性格は、
 我儘わがままに育った我の強いところから来たのか、自意識の強
 いモダンなところから来たのかというのですか。それ
 は両方にまたが跨またがっている。単に自意識の強いモダンなど
 ころを見せようという、それを目的にして書いたなら、
 あゝは書かなかったであろう。しかし一面においてはそ
 れも含んでいる。柔順な女と、我の強い女を、藤尾と糸
 公によって対照させ、そして、そうした性格の異なる二個

の女性の運命を書いて見せたのかというのかね。別にそんな考えはない。必ずしも自意識の強い女はあゝいうふうに終るもので、お糸のように順良な女は、あゝいう結果になると定ったものではない。したがって、あの作に異った性格を有する二個の女性の運命が書いてあるからといって、じきにあの作によって世間全体のあゝした性格の女性を説明し尽したと思われては困る。両方ともあゝいう性格の女はあゝなると定ってはいない。たゞ、パティキュラー・ケースがあゝなるというだけで、全体があゝいう運命になるということは含んでいない。

で、あゝした二個の女性を描き、あの事件を発展させ、そしてあゝした終りになったのは、なにか教訓的意味を含んでいるのではないかとお尋ねであるが、いったい教訓といえは、いわゆる昔流の小説において、道徳上の制裁を、読者も、作者も予期していた時代に、人の云々うんぬんした世の中の教訓に合あわして拵こしらえたのかとお聞きになるのならば、そうじゃないとお答えする。それは作家としてこゝに一種の教訓的の考えを頭に置いて、その考えに都合の好いいように人物を造り、事件を発展させて作物を捏こね上げたということは、自分で作家の資格を削り取

ると同じことではあるまいか。けれども、一種の作品ができて、その作品が、作品としてでき上る——すなわち作品としてほかのモチーフに支配を受けないという意味、さらに言葉^{ことば}を換えてくわしくいうならば、自分が利害関係のために作品を拵^{こし}らえ上げたとか、あるいは私憤を洩^もらすために書き上げたとか、すべて目的の他にあるところの作品は、私は作品としてでき上ったとはいわない。作品としてでき上ったという意味は、何物の支配命令も拘束も受けずに、作品そのものを作り上げるを目的として作られた作品のことである。で、作品としてでき

上ったところのその作品が、なにかの教訓を読者に与えるなれば、あえて作家の辞するところでない。いっそうさしつか差支えないのである。だから読者が『虞美人草』を読んで、この作はこういう教訓を書くために、それに合あわせるようにことさらに作家が筆を曲げて書いたのだということを感じるなれば、私はその作にことさら故意に書き上げた作為の痕跡こんせきが見えるだけ、それだけ多くの作品としては失敗したものであるといわねばならぬ。

けれども、作品としてはしぜんでき上ったもので、わざとらしく教訓を狙ねらって書いたものではないが、しぜ

んどでき上ったその作品の中において、余は如上の教訓を認めえたといふなれば、私は作家として満足である。その作物においてぜひと現わさなければならぬという作家の一種の哲学に捉え^{とら}られて、そして、事件の発展なり、性格の活動なりを、その自分の目的の都合のよいように、作家の私でことさらあゝいう結果に持ち来^{きた}らしたといわれては、たとい、その現わさんとした哲学なり、教訓なりを現わす目的をいかに能^よく達しても、作家としての私の面目は潰れるわけになる。

イプセンをよく引合^{ひきあ}いに出すようであるが、イプセン

のものを読むと、彼^かれは一種の哲学によってその作品を作り上げているけれども、しかし、その作品を読んで、作家が一種の哲学に捉えられて書いた作品であるとは思われ^{われ}ない。描き出されている人間が動いていて、シチュエーションがしぜんに、ことさら筆を曲げたような痕跡なく、あそこ^{われわれ}まで煎^{せん}じ詰め^つられてきているのであるから、吾^{われわれ}々はイプセンを読んで、彼れは一種の哲学を発表するために、ことさらな非芸術な作品を作ったとは思わない。イプセンの作に曲^まぐべからざる生命のあるものはそのゆえだろ^うと思う。ところが、バーナード・ショウになる

と、私はあまり多くは読んでいないが、とにかく自分の読んだだけの範囲でいうと、こゝに一種の哲学なら哲学があつて、それを現わすために、ことさらな劇を組み立てたように思われる。すなわち、その哲学にどこまでも囚われている。哲学に圧迫された劇である。だからそこにイプセンとショウとの間に、大なる差違があるように思う。すなわち同じく哲学を持ちながら、その哲学のために作り上げる作品が累わづわいされて、たゞちにそれが読者の目に見え透くか、あるいはしぜんぜんに作り上げられた作品の中へ、その哲学が畳たみ込まれるかの別れるところ

は、ほんのわずかな一線で、そこが呼吸ものだと思う。私の『虞美人草』などは問題にもなるまいが、とにかく、そのごく幽かすかな一線の別れ方によって、作品として失敗する人と、成功する人とに別れるのである。

教訓的意味を芸術的作品によって、得る必要はないというが、それは、教訓のために作品の価値を曲げては可いけないので、しぜんな作品の中から、おのずから教訓が浮いてくるならいっこう差支さしつかえないと思われる。で、すべての文芸上の作品は、ある意味において、必ず一種の教訓を持ち来きたらすものである、と私は信じている。その

教訓の意味とか、どういう訳で教訓になるとかいうことについて述べたいが、今は時間がないから略する。もつともこれは今度出版する『文学評論』の中にくわしく書いておいた。

(明治四二・二・一『新潮』)

日本文学電子図書館

予の描かんと欲する作品

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 4 卷」角川書店
昭和41年 4 月20日 7 版発行

日本文学電子図書館